

2025 年6月8日 ペンテコステ・花の日こどもの日礼拝メッセージ

「みんな神様の子ども」

牛田匡牧師

聖書 ヨエル書 2 章 23 節 – 3 章 2 節

今年はイースターが遅く 4 月の半ばでしたので、それから 50 日を数える「ペンテコステ」も遅く、6 月になり、しかも第 2 週ということで丁度「花の日こどもの日」と重なりました。そういうわけで今日は「花の日こどもの日」として、メッセージの題を「みんな神様の子ども」としました。日本には「子どもは天からの授かりもの」ということわざがありますが、昔から新しい命が生まれるかどうかは、人間にはわからない部分でした。また生まれてからも、無事に大きくなるかどうかは分からない。そのように計画通りにいかないことも多いからこそ、人々は昔から、神様に願ったり、祈ったりしてきたのだらうと思います。天から授かった命、神様からお預かりしている命だから、大切に育てていきたいと願う親心というものが、確かにあるのだらうと思います。

そもそも今の自分が生きていること、今ここに存在していることの背景には、両親がいて、その両親にもまた両親がいて、と遡って考えていくと、実にご先祖様の人数は、すぐに数えきれない程になります。ちなみに 10 代前のご先祖様の人数は単純計算で 1024 人、20 代前になると 100 万人を超えるようです。それだけの人がいて、今の自分が存在している。そのうちの誰かと誰かが出会わなかっただけで、今の自分は存在していないと考えると、本当に不思議な「ご縁」と言いますか、天の導き、神様の働きがあってこそその一人一人なのだと思わされます。そのようなわけですから、「私は紛れもなく、お父さんとお母さんの子どもです」と言う人や、また「自分は誰の子でもない、親なんていない」と言う人であっても、みんな「神様の子ども」、神様によって命を与えられ、生かされている大切な子ども、命であることには変わりはない、ということには差し障りはないのではないのでしょうか。もちろん、年齢も性別も関係ありませんから、お年寄りでも赤ちゃんでも、みんな「神様の子ども」です。

さて先月のことですが、私はキリスト教保育連盟の研修に参加する機会がありました。ベビーブームなどで、子どもたちがあふれていた時代、多くの教会が隣人愛の実践、社会奉仕の実践として、託児事業、保育事業を行い、そこから多くのキリスト教主義の保育園や幼稚園が生まれてきました。日本コイノニア福祉会もその一つです。その頃は、どこの教会の保育園や幼稚園でも、職員の多くはキリスト教の信仰を持っている教会員だったそうですが、時代を経るにつれて、今ではキリスト教主義の保育園や幼稚園でも、クリスチャンはすっかり少なくなったそうです。日

本の全人口のうちのクリスチャンの割合は、昔からずっと1%とされていますが、キリスト教保育連盟の調査によると、キリスト教主義の保育園・幼稚園で働いている全職員の内、クリスチャンの割合は、さらに少なくても 0.3%とのことで驚きました。

その数字の他にも、印象深かったのが、連盟が掲げている保育指針の変化です。1980 年代頃までは「幼子たち、子どもたちをキリストへ」と言っていたそうですが、1980 年代以降は「幼子たち、子どもたちと共にキリストへ」と変わったのだそうです。そのように指針が変化した理由としては、「かつてはクリスチャンの職員が、子どもたちを教会に導き、キリストの前に連れて行っていた。それが、段々とクリスチャンではない職員が増えてきてしまったので、それらの職員たちも子どもたちと一緒に、キリストの前に行きましょう」といういわば消極的な変化だったようです。「自分はクリスチャンではないから、教会やイエス・キリストのことなんて分からないし、確固とした信仰なんて持ってないから神様のことを子どもたちに教えるなんて出来ない」……。確かに、そのように言われると、なるほどと思わされます。しかし、そもそも神様のこと、というのは、大人が教えるもの、クリスチャンがクリスチャンではない人に教えるものなのではないでしょうか。その部分から見直す必要があるのではないかと思います。

かつて、この世界を作られた神は、「教会を通して人々に働きかける」と考えられていました。ですから人々の側からすると、神様に祈ったり、尋ねたりするためには教会に行き、聖職者と呼ばれる人たちの教えや指示に従う必要がありました。そして教会の側も、「教会を通して神様につながらなければ救いがない」というわけですから、まだ教会と出会っておらず、キリストと出会っていない人たちが地獄に行かないためにも、世界中のあちこちへ宣教師を送り込んで、一生懸命に伝道してきたというわけです。

しかし、そのような「上から目線」、「持ってる人が持っていない人に施しを与える」ような関係性は、植民地主義、排他主義、支配と被支配の上下関係にならざるを得ないということにキリスト教界自身が気付きました。そして、20 世紀の後半を通して、「神は教会を通して世界に働いているのではなく、神は他宗教の人たちも含めて、世界中のあちこちに直接、既に、いつも働かれており、教会はそのような神の働きをお手伝いする役割を担っている」と考え方に変化して来ました。先ほどのキリスト教保育連盟の保育指針の変化も、そのようなキリスト教界全体の考え方の大きな変化に基づいているのではないかと思います。すなわち「子どもたちをキリストへ」が、「子どもたちと共にキリストへ」に変化したというのは、他宗教の人や無宗教の人、キリスト教をまだ知らない人をクリスチャンにさせることを目指すの

ではなく、他宗教の人は他宗教の信仰を持ったまま、無宗教の人も、子どもたちもそのままキリストの前に出ることが出来る。神様がみんなにいつも働いてくださっていることを知ることが出来る。神様から大切にされていることを知ることが出来る、ということなのではないかと思います。

なぜなら、私たちはみんな神様の子どもだからです。大人も子どもも、仏教徒もムスリムも、外国人もみんな、神様の子どもであることには変わりはありません。私たちが、神様のこと、イエス・キリストのことを、知識として知り、学ぶことがもしも不可欠なのだとしたら、知的に理解することが難しい小さな子どもたちや障がいを持っている人たち、また認知症を発症されている方たちは、そこから除外されていきます。しかし、神様はそんなことを望んでおられるでしょうか。今日の「招きの詞」は、子どもたちを招くイエス様の言葉でした。イエス様は「おいで、子どもたち」と子どもたちに声を掛けられ、そしてそれを妨げる大人たちを厳しく諷められました。「この子どもたちを受け入れることができなければ、神の国を受け入れることもできない」と(マルコ 10:14-15)。

今日はペンテコステ、聖霊降臨日です。十字架で殺されたイエス様が、3 日目に死から引き起こされたイースター。そのイースターから 40 日間、イエス様は弟子たちと共におられましたが、その後、天に昇って行かれました。でも、自分の姿は見えなくなる代わりに、聖霊を与えるという約束通りに、50 日目のペンテコステの日、弟子たちに聖霊が与えられた、今日はそのことを記念する日です。そして「使徒言行録」の 2 章では、今回の「ヨエル書」3 章の預言の言葉を引用して、「すべての者に霊が注がれ、息子や娘は預言し、老人は夢を見、若者は幻を見る」状態が成就した、実現したとペトロが語った、と記されています。また今回は読みませんでした。弟子たちは部屋の中にいたのに、「突然、激しい風が吹いてくるような音が天から起こり、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他国の言葉で話した」(使徒 2:2-4) そうです。

一体何がどのような状態になったのか、具体的にはよく分かりませんが、自分でも「霊に満たされた」と感じて力がみなぎる実感があり、また周りから見てもそのように感じられた状況があったのかもしれません。そのような状況が、今から 2000 年前の人々によって、文学的な表現で記されているのだらうと思います。「激しい風」や「炎のような舌」と言われたり、また「鳩のように」(マルコ 1:10)と言われたりする聖霊とは、どのようなものかと言うことが出来ないからこそ、様々なものにたとえられて表現されているのでしょうが、一言で言えば、共にいてくださる

神、私たちが決して独りぼっちではなく、神様が共にいて働いてくださっていると
感じさせてくれる存在、ということではないかと思います。

私たちは一人ひとり限界を持った存在ですから、見聞きできる範囲も、感じられ
る範囲も限られています。ある時は、神様が一緒にいてくださると感じ、確かに祝
福され、たくさんの恵みを頂いていると感じて感謝する。けれども、またある時には
自分は神様から見捨てられ、見放されたから不幸になってしまった、それも元はと
言えば自分が悪かった、自分の罪のせいだと落ち込んだりもする……。まさに山
あり谷ありです。ですが、少し離れて振り返って眺めてみれば、いつだって神様は
共にいてくださった。神様が働いていなかった時なんてなかった、と気付くことが
出来るのではないのでしょうか。

ヨエルという名の預言者が活動した、紀元前何百年も前の時代、古代イスラエ
ルの国は、バッタの害によって食べる物がなくなり、国は荒廃し、人々は苦しみ、泣
き叫びました。その中で、人々はそれまでの自分たちの不正を振り返り、断食し、
神に向かって立ち返り、神に改めて向き直すことを通して、神は再びイスラエルを
恵まれ、「あなたがたは、私がイスラエルのただ中にいることを、知るようになる」
(ヨエル 2:27)と言われました。これらは言い換えれば、神様はいつも、私たちと
共にいてくださるけれども、私たちの目の方がその時々、まるで空の天気のように
曇ったり晴れたりして、神様の恵みが見えたり見えなかったりする。そして神様
に向かって文句を言ったり、泣き言を言ったりする。そのようなものなのかもしれま
せん。

教会では、「洗礼によって神の子とされた」という表現が聞かれることがあります。
そして、もしこの言葉が文字通りの意味であれば、洗礼を受ける前、また洗礼を受
けていない人は、神様の子どもではない、ということになってしまいます。しかし、言
うまでもなく、みんな神様の子どもですから、洗礼を受けていなくても、また受けた
ことを自分でも、また周りのみんなも忘れてしまっても、もちろん認知症になったと
しても、神様が共にいて、たくさんの恵みを与えてくださっていることには変わり
はありません。

イエス様の死からの引き起こしが、死は死に終わらず、絶望は希望に変えられる
ことを証ししていたように、聖霊が与えられたペンテコステの日、私たちは改めて
目には見えなくても、全ての命を作られた神様の息吹が、すべての人たち、全ての
命の中に与えられていることを、覚えさせられて、導かれていきます。